

ツヅミクラゲ



傘の途中から触手が生えるツヅミクラゲ

走っているのも特徴で

通のクラゲが4放射相

京都大学瀬戸臨海実験所の
北浜へ冬に打ち上げられたク
ラゲの一つに、大型のツヅミ
クラゲがあった。肉眼で確認
できるほどで、直径数センチ

久保田 信

58



の大きさである。傘のゼラチン質は触るとやや硬めで、円盤状の傘の頂は平たくなっている。

体の中央付近が紅色で美しい。この胃腔(いこう)を彩る空所は10個の部屋に分割されている。ここには生殖巣も形成される。

触手は、普通のクラゲでは傘の縁から伸びるが、ツヅミクラゲは傘の途中から触手がすうりと生じている。触手の根元は膨らんでいないのも特徴である。触手は等間隔に規則正しく5本ある。各触手の間には感覚器が2個ずつあるので、計10個になる。これら10個と5本の配置は、普通のクラゲが4放射相

ある。しかし、個体変異があって、この典型的な姿の個体の他に、触手が4本や6本の個体がいる。この場合、相称性が異なることになる。

体の中央にぽっかり空いている丸い大きな穴が口である。かなり大きな獲物をのみ込むことができるのだが、採集時に獲物が見つかることはまずない。口にはまったく唇は発達しない。この特徴も他のクラゲと異なっている。

ツヅミクラゲは、若い時に他のクラゲ類の体に付着するという特徴がある。自らは泳がないが、浮遊生活をともにしているわけである。親になったらクラゲの姿になって自らクラゲらしく浮遊するのである。

このため、卵から親まで一生プランクトン生活を送る。幼いときから外洋性なので、水族館ではなかなか飼育できない。以前紹介した触手が多くて平たいニチリンクラゲと同じ仲間、剛クラゲ類に属する。

(京都大学准教授)